2023年6月発行

CWS JAPAN NEWSLETTER NO. 81

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

アフガニスタンで食料危機に直面する人々を支える

世界で最も複雑な人道的緊急事態に見舞われているアフガニスタン。40年にわたる紛争、経済の低迷と現地通貨アフガニーの下落、干ばつや地震といった自然災害、貧困の拡大、加えて新型コロナウイルス感染症の拡大やロシアのウクライナ侵攻による燃料、飼料、食料価格高騰の影響により、全人口の95%が十分な食料を得られていません[1]。国連の報告によれば、総人口の半分にあたる2,150万人、つまり2人に1人が、食料不安を抱えているとされています[2]。

食料不安を測る世界標準の総合的食料安全保障レベル分類（Integrated Food Security Phase Classification: IPC）でも、2022年3～5月の間、アフガニスタンの総人口の約21%が「人道危機レベル」以上に（内5%は1番状態が悪い「飢餓レベル」のフェーズ5）、約31%が「急性食料危機レベル」のフェーズ3相当の状態にあります[3]。5歳未満の子どもにいたっては、重度の急性栄養失調で医療施設に収容される数が、2020年3月の1万6千人から今年3月には2万8千人と増えており[4]、拡大する食料危機に国際社会からの支援が必要でした。

BIG ANOUNCEMENT!

途上国支援につながる日本の技術・ノウハウをどうやって現地に根付かせるか？についてのトークイベント（オンライン）を開催します。
詳しくは▶こちら◀

写真
アフガニスタンで
実施している食料支援の裨益者
©CWSA

事業概要
CWS Japanはこうした状況に対して、ジャパン・プラットフォーム（JPF）の「中東・アフリカ食料危機支援プログラム」のもとで、現地パートナー団体とともに状況の深刻な地域の一つであるナンガルハル県で支援を実施しました。食料品をメインとした、生命をつなぐために必要な生活必需品入手のための現金を配布します。

具体的には、アフガニスタン・ナンガルハル県の3地区における最も脆弱な家庭625世帯に対して1世帯あたり毎月約1万円の現地通貨を3か月間にわたり配布しました。1ヶ月あたり約1万円の現金キャッシュで1世帯平均7名分の小麦粉、米、油、豆類、砂糖、塩を購入することができます。これらの金額は国際的な指標に基づいて定められ、必要に応じて更新されています。

最も脆弱な家庭とはどのような人々のことなのか？それは、とりわけ深刻な危機に瀕している障がいや慢性疾患を抱えている方、高齢者、国内避難民、女性や子ども、貧困に苦しむ方、孤児といった脆弱な人々です。そのような方々のいる家庭に対して優先的に、食料品入手のための現金を配布する支援を実施しました。本事業では、食料不安を抱えている人々が、受け取った現金で栄養価の高い食料や生命維持に必要なものを手に入れられることを目的としていました。

写真

現金給付の様子 ©CWSA

活動結果
活動の結果、目標としていた625世帯には届きませんでしたが、604世帯に支援を届けることができました。この裨益者数が減ってしまった主な要因は、（最近またその傾向が再開していますが）当時急激に進んだ円安によって、海外送金時の大幅な為替差損が発生したためです。

裨益者の数は減ってしまいましたが、対象の604世帯すべてが2023年1月、2月、3月の3ヶ月連続で現金をタイムリーにそして安全に受け取れてことが確認できました。

栄養状況・食料消費量の変化
配布の回を重ねるごとに、各世帯の食料消費量が増加し、第3回目の現金配布後では、全世帯において、必要最低限の食料ニーズを満たすことができるようになったことを示す数値が確認できました。特に、支援前後と比較して、肉・魚・卵などの食品へのアクセスが劇的に改善しました。

支援への満足度
活動後の調査では、すべての世帯が、食料の現物支給よりも現状の方法のような現金配布がいいという意見など、支援の方法や現金の受給額について高い満足度を示しました。インタビューでは、この現金支援は食料不足の問題を解決しただけでなく、食料不足による家族間の緊張を和らげたり、他のコミュニティ・メンバーとの関係も改善したりといった効果ももたらしたことがわかりました。

インパクト
この事業は食料危機に瀕した人々の生命を繋ぐことの短期的なインパクトに焦点を当てていました。

本事業の裨益者の一人、ベネシュさんは、8人の子どもの母親でもあり、高齢のために働くことが難しくなってしまった夫を支える妻でもり、家計を支える大黒柱でもあります。支援実施前は、前述のアフガニスタンの状況のために、女性であるベネシュさんが経済的な機会を新たにつかむことは男性よりも難しく生活に困窮していました。土地などの資産を売るなどしてその場をしのいでいましたが、それも長く続かず、子どもたちは、近所の人

から時折恵んでもらう野菜や果物か、その他はほとんど少しの乳製品と白いパンがあるくらいの食事でした。13歳の娘のヤシュファさんは、喘息ですが、薬代や紹介された病院へ行くための資金がない状態でした。

今回の現金支援によって、ベネシュさん一家は、多様な種類の食料品を購入することができ、また、ヤシュファさんを病院に連れて行き、薬も買うことができました。現地チームによるインタビューを実施したとき、ベネシュさんは、このような思いがけない支援を受けられると知ったとき、嬉しくて涙が出たと語っていたそうです。

脆弱な家族に支援を届けることに留意した結果、社会的にも疎外されやすい女性に手を差しのべることができ、また、家族に希望を与えることができました。

写真
ベネシュさんの家。
ここで家族9人で暮らしている。©CWSA

さいごに
CWS Japanはこのような食料危機に直面している脆弱な人々に1人でも多く支援を届けられるように、特に社会経済的に権利を著しく制限されている女性を対象として支援を継続する予定です。詳細については、またご報告させて頂きます。

どうぞ、引き続き、皆さまからの温かいご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

▶ 寄付をする ◀
※CWS Japanに対する寄付は税控除の対象になります。

（文：プログラム・マネージャー西澤紫乃）

隣人としての難民に出会う

辛いニュース
先週の6月9日、「なぜこのタイミングで？」と思わせるような出来事が起こりました。今年3月、「出入国管理及び難民認定法」（入管難民法）の改正案が国会に提出されて以来、弁護士、市民団体、宗教団体、有識者などのグループ組織が次々と反対声明を出すとともに、国会前のシットインや全国各地で様々な抗議行動が展開されていたにもかかわらず、5月9日、衆議院で可決、その1カ月後には参議院において強行採決されました。これによって、難民認定の申請は原則2回までに制限し、3回目以降の申請者を強制送還することが可能になってしまいました。

すでに力を持っている、優位に立つマジョリティの意見が優先され、マイノリティや声なき声はもはや聴かれることがなく、今回の強行採決を通して、わたしは民主主義の危機を感じました。

難民認定に関わる重要な立場にある方による「日本の難民認定申請者には難民がほとんどいない」という公の場での発言は世間の議論を引き起こしました。

クラウディオさんとの出会い
わたしは難民でありながらも日本政府から難民として認められず複数回、不認定とされた人たちとの関わりがあり、その一人一人の顔が浮かび、とても辛い気持ちになりました。この法案が可決された数日前、わたしはそのなかの一人であるチリ人のクラウディオさんのお部屋を友人たちと訪問していました。彼から細やかで優しさに溢れたもてなしを受け、都会の片隅で静かで謙虚な彼の暮らしぶりに触れ、日頃のストレスを忘れ、わたしたちも平和な気持ちになりました。プロのシェフであるクラウディオ・ペニャさんは来日してから、すでに20年以上になります。70年代にチリで起きたクーデターにご家族が巻き込まれ、そのせいで90年代の民主化後、迫害を受けてしまい、身の安全のため、母国を離れ、ヨーロッパで暮らした後、日本にたどり着き、都内のレストランで人気シェフとして

腕を振るっていました。その彼の人生を狂わせてしまったのが、2011年の東日本大震災でした。彼が働くはずだった店のオーナーが震災を機に閉店を決め、帰国してしまったことによって、保証人を失い、その結果、在留資格を失ってしまった話を聴きました。2011年の震災はこんな形でも誰かの人生を狂わせてしまったのかと愕然としました。

写真
日本語学習支援者のケイコさん・アカネさんとクラウディオさん宅でランチ
©CWS Japan

難民のライフストーリー
彼の話を聴いていて、実は、わたしがこれまでに出会ったチリ国籍の難民はクラウディオさんが初めてではないことをふと思い出しました。自分の人生で最初に関わったルワンダ難民キャンプの仕事で出会い、わたしをリクルートしたかつての上司も、そう言えばチリ人で元難民でした。その上司の自宅で（彼が言うには世界最高の）チリのワインがふるまわれ、自身が難民としてイギリスに渡り、そこで教育を受けた後、同じ境遇のチリ人の妻と夫婦で難民への教育支援を行っていた現場の話を聴いたことがあると話したところ、「その上司もきっとクーデターの時の難民かもしれない」とクラウディオさんに言われました。

また、ここで一つ、自分の過去の経験と今、目の前にいる難民の方のライフストーリーがつながったような気がしました。

隣人としての難民に出会う
このように難民一人一人に人生があり、日本にたどり着くまでのライフストーリーがあります。このような一人の人生は書類で判断され、決めつけられることではないはずです。

写真
クラウディオさんのプレートランチ
©アカネさん

このような一人の人生は書類で判断され、決めつけられることではないはずです。

「マイノリティの声をマジョリティにしたい。」そのためには、一人でも多くの市民が日本にいる難民に出会い、存在を理解し、隣人として受入られる共生社会を創りたい。その機会と場を提供したくて、新大久保の教会でコミュニティ・カフェを開店し、彼らのような難民を主役にと、5月の連休にはワールド・バザールを開催しました。

写真
クラウディオさん作：
入管収容所内から見えた空©CWS Japan

コミュニティ・カフェ@大久保では、8月の企画として、クラウディオさんを講師としてお招きし、チリ料理のクッキングレッスンを準備中です。募集案内は随時、コミュニティ・カフェ@大久保のSNSでご案内いたします。

写真
チリのエンパナーダを作ろう！
©CWS Japan

皆様のご来店をお待ちしています。

（文：ディレクター　牧　由希子）

◆◇コミュニティ・カフェ@大久保◆◇
公式SNSアカウント
Facebook
Twitter
Instagram

多様性を知る、多様性に触れる

CWSは日本だけでなく、世界各地に事務所を持ち、活動しています。その本部はアメリカ・ニューヨークにあります。

CWS本部へ
アメリカでの大きな活動のひとつが、難民定住支援です。CWS Japanも日本で外国人脆弱層支援を始めたことから、外国人支援の先進地のひとつともいえるアメリカでの活動の実際や経験を学ぶために、CWS Japanのスタッフ4人で、ニューヨーク本部と隣の州に位置するジャージー・シティー事務所を訪問してきました。

5月22日、23日：ニューヨーク本部
コロンビア大学近くにある本部にホテルから地下鉄で通いました。アメリカの複数の州にCWSの事務所がありますが、それらの組織体制、難民受入の仕組み・取組み、支援対象、どのように地域やボランティアなどを活動に巻き込んでいるか、事例としてジャージー・シティーでの活動の歴史、課題などについて、多くのスタッフから説明を聞き、質問することが出来ました。

写真
ニューヨーク本部での会議の様子
©CWS Japan

5月24日、25日：ジャージー・シティー事務所
実際に難民支援をおこなっている事務所と現場を訪問できました。中南米からの難民へのオリエンテーションや彼らの面談に同席したり、アフガニスタンやウクライナ、中南米出身のスタッフから支援活動（就業支援ほか）の実態を教えてもらったりしました。

経済的に厳しい状況にある外国人のためのシェルターや支援物資倉庫も見学できました。

写真
ジャージー・シティーの現場をまわる
©CWS Japan

印象に残ったこと
制度の違い
アメリカは国の政策として多くの難民を受け入れており、その政策実施を受託している団体のひとつがCWSです。
難民受入が年間約70人の日本とは前提が大きく異なり、資金規模も含む制度の充実は比べようもありません。しかし、アメリカでも就業と住居の支援は困難であるということもわかり、公的支援の枠組みから取り残されてしまう外国人を支援する事業の難しさをあらためて知りました。

さまざまな「当たり前」の違い
多様性（ダイバーシティー）という言葉を日本でも日常的に目や耳にしますが、ニューヨークでは日本のものとは数段違う多様性をさまざまな場面で体験しました。
中南米からだけでも年間10万人以上が陸路でやってくるアメリカと島国の日本では共通点よりも違うことの方が多いと思います。
外国人を養子に迎えたスタッフが地域で外国人支援の輪をどう広げているかを聞きながら、日本では同様のケースがどれだけあるのだろうか、国の制度の違いはそこに住む人たちの意識の違いでもあるとあらためて思いました。

管理業務担当として
わたしは管理業務担当であるため、事業への関わりは間接的、いわば「裏方」のようなかたちです。
アメリカのスタッフたちは、ハッピーな話だけではなく、たくさんの難しい状況や経験も紹介してくれました。難しいことに前向きに取り組み続けている彼らからは、言葉以外のこともたくさん伝わってきました。
より良い事業とはなにか、それを続けるためにはなにが必要かを考えながら、業務にあたりたいと思います。

（文：管理業務マネージャー　高松知文）

過去のニュースレターやインタビュー記事は下記よりアクセス頂けます。

過去のニュースレターはこちら

インタビュー記事はこちら

ご高覧頂き有難うございます。次回のニュースレターは7月末の発行を予定しています。

特定非営利活動法人CWSJapan
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館25号室

メールアドレス：
public@cwsjapan.jp
電話：
03-6457-6840

CWSJapan
@Japan_CWS
cws_japan